

## 教育研究グループ「研究結果」報告書

報告日 令和2年3月4日

グループ名	なかとみ	フリガナ 代表者氏名	加藤 トシ 金高 俊哉
学校名 (代表者)	大田区立中富小学校	電話番号	03-3762-6756
研究テーマ	自ら進んで学び、互いに高めあう子の育成		
研究期間	平成・令和31年4月1日 から 令和2年3月31日 まで		
研究結果 の概要  ※詳細は別 紙により 報告	<p>1 研究の概要</p> <p>(1) 研究テーマ「自ら進んで学び、互いに高めあう子の育成」 サブテーマ 「わかった、できた、楽しいが実感できる授業をめざして」</p> <p>(2) 研究の進め方 今年度は教科を国語に絞り、「話すこと、聞くことを通して自己肯定感を高めること」を目標にすることにした。「話すこと、聞くこと」の学習を通して、児童に学ぶ楽しさやできる喜びを味わわせることで、自己肯定感の高い児童を育成することをねらった。</p> <p>(3) 研究の内容</p> <p>①授業研究 「低学年分科会」と「高学年分科会」の2つで編成された分科会で、児童の発達段階に合わせて年間4回の研究授業を設定した。その際、児童の実態を分析し、指導法を工夫することで主題に迫っていくこととした。</p> <p>②全体研究会 指導力の向上を目指すために、全体研究会の機会を設けるようにした。専門性のある講師を招いて、研究を深めた。</p> <p>(4) 成果と課題</p> <p>①成果 事後のアンケートには、「話をする」とが好き、「友達の話に質問や感想」を言えると答える児童が多かった。授業を通して発表することに自信をもったり、注意深く発表を聞こうとする意欲が高まったりしていると考え。研究を通して、自己肯定感を高めることができたと考え。</p> <p>②課題 「話をするのが好き」という気持ちを持続させるために、適切な声掛けや効果的な教材づくりをしていくことが必要である。学年が上がると話題に対してさらに柔軟に対応し、臨機応変に受け答えができるようにする必要がある。そのためには、国語の学習以外でも日々の様々な場面で話し合い活動の充実を測ることが大切である。</p>		
その他 特記事項			

令和元年度 教育研究グループ「研究結果報告書」  
グループ名「なかとみ」

1 研究テーマ

自ら進んで学び、  
互いに高め合う子の育成

～わかった、できた、楽しいが実感できる授業をめざして～

2 研究テーマ設定の理由

指導する児童の実態を考えたとき、自分の学力に自信がもてず、自分の言葉で表現することをためらう児童が多くいると思われる。

この実態を踏まえ、研究教科を国語とし、「話すこと、聞くことを通して自己肯定感を高めること」を目標にすることにした。「話すこと、聞くこと」の学習を通して、児童に学ぶ楽しさやできる喜びを味わわせることで、自己肯定感の高い児童を育成することとした。

3 研究の基本的な考え方

研究のサブテーマとして、「わかった、できた、楽しいが実感できる授業をめざして」を設定し、以下のように研究を進めていく。

(1) 「楽しい」を実感させるために

児童に「楽しい」を実感させるために、アンケートを実施して、児童が学習中にどの部分に楽しさを見出しているのかどの部分に苦手意識をもつのかを分析する。その結果から、教師側のねらいに沿った授業をするためにどんな手立てをしたらよいのかを各分科会で話し合う。児童の人間関係や、得手・不得手等を考慮したグループ作りをし、学習の流れを明らかにして見通しをもって活動できるようにさせることが重要である。

また、付箋や発表で友達に対してのプラス面の評価を書かせる時間を取る。これにより、努力したことを友達に認められ、自己肯定感を高めることにもつながると考える。

(2) 「わかった、できた」を実感させるために

児童が「授業は楽しい」と思うようになれば、学習意欲が向上し、すすんで学ぶようになると思われる。その結果、知識や理解が深まり、「わかった。できた。」と実感する経験も増え、新しい課題を自分の力で解決しようという気持ちも生まれてくる。教師はそうした児童の活動を適切に見取り、十分に時間を取って一人一人の課題解決に必要な声掛けや、資料提示などを行い、自力で課題解決できるように支援することが重要である。

また、努力の結果が確実な達成感につながることで、授業での取り組みによって、できなかったことができるようになったという喜びを味わうことが、自己肯定感や自信につ

ながら、友達に対しても肯定的な考え方ができるようになり、互いに高めあう学びにつながっていくと思われる。

## 4 研究の内容

### (1) 研究の内容

#### ①授業研究

2つの分科会で、児童の発達段階に合わせて年間4回の研究授業を設定した。その際、児童の実態を分析し、指導法を工夫することで主題に迫っていくこととした。また、授業研究の日だけの研究に終わることのないように、成果と課題が日常の授業に生きる提案をしていくこととした。

#### ②研究全体会

指導力の向上を目指すために、研究全体会の機会を設けるようにした。専門性のある講師を招いて、研究主題をテーマとした研究全体会を行った。

#### ③全メンバーの授業実践

4回の研究授業のほか、全メンバーが「自己肯定感を高める観点」を指導に位置づけ、授業実践を行った。また、同じ分科会のメンバーが授業を見ることで、全メンバーの意識向上を図ることとした。

### (2) 研究主題に迫るための手立て

#### ①2つの分科会

今年度は国語の「話すこと・聞くこと」を取り入れた学習を通して「自己肯定感の高い児童」を育成することを目標に、低学年・高学年の2分科会を設定した。それぞれの分科会で児童の発達段階を踏まえた実態把握を十分に行った上で、学習活動や指導法の工夫について提案することとした。

#### ②指導法の工夫

児童がその場限りで終わることのない基礎基本を身に付けられるよう、それぞれの分科会において指導法を考えた。低学年分科会ではアンケートの結果や人間関係を踏まえたペアやグループ作りをし、楽しく学べるようにした。

また、友達からプラスの評価をしてもらうことで自己肯定感をもてるように工夫した。高学年分科会では、明確な課題をもたせ、見通しをもって活動させることにより、自信をもって学習できるようにした。また、意欲的に活動させるために、事前準備の時間を十分にとったり、体験学習を取り入れたりする授業づくりを行った。

## 5 研究経過

月 日	内 容	講 師
4月8日 (月)	全体会① 今年度の研究について (内容・組織・方向性の確認) 分科会① 分科会テーマ、授業者等を決める	
5月9日 (木)	全体会② 講演会	東京女子体育大学 児童教育学科 教授 田中 洋一先生
6月20日 (木)	分科会② 各分科会でテーマに沿った話し合い、 指導案作成等をする	
7月12日 (金)	分科会③ 各分科会でテーマに沿った話し合い、 指導案作成等をする	
9月18日 (水)	授業① 2年1組 つたえたいことをはっぴょうしよう 「大すきなもの、教えたい」 授業者 宇賀久美主任教諭	全国情緒障害教育研究会 常務理事 斉藤 登先生
10月23日 (水)	授業② 4年1組 調べたことを整理し、発表しよう 「だれもが関わり合えるように」 授業者 菊地俊正教諭	大田区教育委員会 指導課 指導主事 山崎 大志先生
11月20日 (水)	授業③ 6年1組 立場を明確にして主張し合い、考えを 広げる討論をしよう 「学級討論会をしよう」 授業者 高橋秀人主任教諭	東京都小学校国語研究会 参与 依田 雅枝先生
1月15日 (水)	授業④ 1年1組 きいてしらせよう 「ともだちに、きいてみよう」 授業者 中水なつみ教諭	東蒲小学校 校長 八木 貴弘先生
2月26日 (水)	全体会・分科会④ 今年度の反省と次年度の方向性につ いて話し合う	
3月2日 (火)	全体会④ 次年度の方向性確認と紀要製本	

## 5 成果と課題

今年度研究テーマを「自らすすんで学び、互いに高め合う子の育成」サブテーマを「分かった、できた、楽しいが実感できる授業をめざして」と設定して研究に取り組んだ。児童の実態から教科を国語に絞り、自己肯定感を高めることを主眼に置いて取り組むこととした。

その結果、以下のような研究の成果が明らかとなった。

### (1) 成果

#### ①低学年分科会の実践から

第1学年、第2学年で研究授業を行った。個人→グループ→全体といった発表への流れがはっきりさせることで、児童が安心して学習に取り組むことができた。グループでの活動時や全体での発表時は、児童の役割を明確にすることで、スムーズに進行できた。全体での発表では、発表が苦手な児童は他の児童の様子を見てから発表することで自信をもって発表することができた。付箋を活用することで、児童が付箋の利用法を身に付けることができた。

事後のアンケートには、「話をすること」が好き、「友達の話に質問や感想」を言えると答える児童が多かった。授業を通して発表することに自信をもったり、注意深く発表を聞こうとする意欲が高まったりしていると考ええる。研究を通して、自己肯定感を高めることができたと考ええる。

#### ②高学年分科会の実践から

第4学年、第6学年で研究授業を行った。指導計画がきちんと作成することで、児童が見通しをもって授業に取り組むことができた。児童の役割分担がはっきりさせたので、児童は自分がどうすればいいか考えて活動することができた。第4学年では、付箋を活用することで分類・整理ができていた。第6学年では討論会を繰り返す中で、改善点を振り返り、そのことを意識しながら討論会をより良くしようとする意識が高まった。

課題を明確にして、その課題を解決するために話し合ったり調べたりすることを通して、自分のすべきことがはっきりし、授業に意欲的に取り組むことができるようになった。調べたことを発信することで友達に認められ、自己肯定感が高まったと考えることができる。

### (2) 課題

上記のような成果が出た一方、下記のような課題も浮き彫りとなった。

#### ① 学年分科会

1年生の授業では、児童の知識に差があり、インタビューの内容を深めることができない場面があった。誰でも話し合いを深められる内容にするか、教師がフォローできるようにしていく必要がある。また、「話をすることが好き」という気持ちを持続させるために、適切な声掛けや効果的な教材づくりをしていくことが必要である。

#### ②高学年分科会

焦点を絞るために話し合いの方法を指導していく中で、話題のポイントをより明確にする

必要がある。話し合い活動では、学年が上がると話題に対してさらに柔軟に対応し、臨機応変に受け答えができるようにする必要がある。そのためには、国語の学習以外でも日々の様々な場面で話し合い活動の充実を測ることが大切である。

これらの課題を解決するために、今後も研究を続け、児童の自己肯定感が高まるような指導方法の研究を引き続き行っていきたいと考えている。